

2020年1月28日

2020年1月 Nr. 466

今回は「失敗」についての考察です。

失敗は人生にはつきものです。失敗は人の一生を通じてついてまわるもの、随伴するものであるとも言えるかもしれません。人は再三再四失敗することに対し心の準備をしておかなければなりません。当然のことながら困難な仕事・課題を成し遂げた達成感も経験しており、こちらをより頻回に経験したいと考えています。

2019年1月10日のこの放送の担当記者でもあるヘヒトさん (Herr Hecht) は、多くの人が購入した本を書いています。ヘヒトさんの2017年の最新作である「インターネットにおける花嫁探し」 („Auf Brautschau im Internet“) は、以前のヘヒトさんの著作ほどは売れてはいません。ヘヒトさんのこの著作は、2009年のもう一つの作品と同様、ピーパーフェアラク (Piper Verlag 1904年に創立で在ミュンヘンの大衆文学やノンフィクション分野の書籍を扱う出版社) から出版されました。一方では、ヘヒトさんの他の8作品は10社の出版社から発売されています。ヘヒトさんは、何年もの間、作家として多くの成功を収めてきましたが、今やピーパーフェアラクのヘヒトさん担当編集者はヘヒトさんに、当面本の執筆は止めることを勧めてきています。また、他の複数の出版社も、ヘヒトさんが提案した複数の出版企画案を断ってきている状況にあります。

ヘヒトさんの16歳になる息子は、ヘヒトさんが南西ドイツ放送 (SWR) のために「失敗」というテーマについてのある放送番組に取り組んでいることを知ったとき、冗談のつもりで、「それだったらきっとパパが精通しているテーマかもね」と言いました。ヘヒトさんはこの放送番組のために、人は失敗とどう向き合っているかを自分自身でじっくり考えただけでなく、ヘヒトさんと類似の本を書いている他の3名の作家とも話し合いました。

ベルントさん (Frau Berndt) は、南ドイツ新聞 (die Süddeutsche Zeitung) の編集者を務めていますが、その傍らで「満足」について考察した本を出版していました。シュピッツァーさん (Herr Spitzer) は、心理学者です。シュピッツァーさんはその本の中で人はいかに完璧主義を克服するかというテーマに取り組みました。ヴォルファースさん (Frau Wolfers) はカトリック教徒です。ヴォルファースさんは、「勇気を持つための技法・テクニク」 „Die Kunst, mutig zu sein“ についての本を書きました。

ヘイトさんは、成功が人生で最も重要であるべきだという考えや、常に成功を収めない人に対しとても否定的な反応をするのは良くないと思っています。その事例は、実はヘイトさんが1人のガールフレンドとある喫茶店にちょっといたことがありましたが、そのときに身をもって経験したものでした。その場にはガールフレンドの知り合いの男性もいましたが、ガールフレンドがその男性にヘイトさんを紹介し、ヘイトさんが本を書いていることを伝えると、その男性がすぐさまスマートフォンを取り出し、インターネットでヘイトさんの本がたくさん売れているかどうかを検索したのです。その男性はヘイトさんの新作の本の売れゆきが良いとは全くいえなかったことが分った途端、ヘイトさんと話す興味を失ってしまいました。

シュピッツァーさんは、インターネットは、人生における多くのことが成功や失敗とは全く関係ないにもかかわらず（例えば、森で散歩をする場合など）、人が以前より成功のことをより気にかけるようになる結果をもたらしていると思っています。ヴォルファースさんは、人間は成功や失敗以上のものであると指摘しています。重要なのは、人があるがままに、つまり人のすべての欠点や失敗も含めて、他の人たちから受け入れられることであるといえます。

失敗は、人がどのような人間かという認識が人に育つ結果になりえますし、また人の限界を知るのに人に役立つ結果になります。人はこの限界の範囲の中で、平穩に生活するべきです。天使たちは、自分自身を余り重要に考えないから、飛ぶことができるという言い方がありますが、ヴォルファースさんはこの箴言が気に入っています。ベルントさんは、人間は成功と結びついている幸福感ゆえに成功を必要としているという意見です。目標を追求し、達成することで人は生きるといいます。

失敗したことに對し腹を立てることもまた、従って、全く普通であるといえます。しかしながら、気をつけなければならないのは、腹を立てすぎないことだといえます。これは訓練することができますし、他の人及び自分自身のあらゆる期待には応えることができないし、常に期待に応えることを望まないで心の準備をすることができるといえます。失敗は評価の問題でもあるということです。人は多くのことをできないということを受け入れるべきであり、失敗は人に他の方策を探る機会を提供してくれもするといえます。

シュピッツァーさんは、失敗したことを理由に自分が無能な人間と感ぜないよう警告します。人は自分自身に失望しているかもしれませんが、自分自身の価値は、人が成功するというに左右されてはならないといえます。というのは、どの失敗も人がどのような人間であるかということと関係するわけではないからです。人があるテニスの試合に負けた

からというだけで、その人が下手なテニスプレイヤーということではないといいます。敗北を人生の一部として受け入れなければならないといいます・・・。

さて、ヘイトさんは、初対面の相手が自分の著書の売れ行き具合をヘイトさんの前でスマートフォンを使って検索するということを経験していますが、私はこの行為はその男性のマナー違反であると思いますし、初対面の相手に対し失礼だろうと思います。このような行為に対しては一般的にドイツではどのような反応があるのでしょうか。その時同席していたヘイトさんのガールフレンドはその男性の知り合いでもありますので、その男性の行為を制止するか、やんわりと忠告すべきだったのではないかと私は思います。ヘイトさんは失敗を許容しない社会ゆえに成功しないことに対し否定的な態度を取った男性の例を自分の体験を通じて語っているように思えますが、私にはむしろ、ヘイトさんの前でスマートフォンを使って検索した初対面の男性の行為の非常識さが気になりました。

また、放送の中でシュピッツァーさんが 100 点満点のテストで 80 点を取った場合、その得点は成功と言えるのか、それとも失敗というべきなのかと言う問いを発し、その期待値・要求値が重要なので、成功と失敗のいずれとも言うことができると述べています。正にその通りだと思います。私はテストの場合には、難易度が期待値を上げさせもし、下げさせもする要素のなるからだろうと思います。つまり、難しいテストであれば、期待値が低くなる結果、例えば 80 点であれば上出来であると思えますし、易しいテストであれば勢い期待値が高くなるため、80 点でも不足と言えるからです。

さて、先日のゲーテの授業で aus gesundheitlichen Gründen/Gesundheitsgründen 「健康上の理由で」という表現が出てきたばかりで、この表現がまだ何となく頭にすみに残っていたところで、今回の放送でも aus Zeitgründen (Beiheft の 54 ページ) 「時間不足のために、時間的な理由から」という理由を表す似たような表現に出会しました。

そこで「・・・の理由で、・・・の理由から」を表す表現を手元の辞書で調べてみましたところ、日常すぐ応用できそうな次のような表現が出てきました。

aus Platzgründen 場所が狭いため、紙面の都合で

aus persönlichen Gründen 一身上の理由で、個人的な理由で

aus unerfindlichen Gründen わけのわからない理由で、不可解な理由で

上記の反対で aus verständlichen Gründen 納得できる理由で、もっともな理由で

aus wirtschaftlichen Gründen 経済的な理由で

aus zwingenden Gründen やむを得ぬ理由で

また、課題の最終部で warnen を使った表現が出てきますが、warnen は私を含めたドイツ

語学習者にとっては要注意の単語だと思います。例えば手元の辞書に記載の次の例文のように、vor の次に単語が来る場合は特に問題はないと思います。

Er warnte mich vor Taschendieben. 「彼は私にすりに注意するよと言った」
Die Polizei warnt vor Glatteis. 「警察は路面凍結への注意を呼びかける」

ところが、以下の例文のように不定詞で表す行為が続く場合は、注意が必要だと思います。ドイツ語の文では否定語がないにもかかわらず、日本語では否定語を挿入したほうが自然に聞こえるから不思議な現象だと思います。

Sie warnte ihn davor, zu schnell zu fahren.

「彼女は彼にあまり車のスピードを出さないように駄目を押した/警告した」(「出すことに対して」でも意味は通じるとは思いますが、やや不自然な感じを受けます)

Ich habe ihn davor gewarnt, allein in die Berge zu gehen.

「私は彼に1人で山に入らないように注意/警告した」(「入ることに対して」でも意味は通じるとは思いますが、やや不自然な感じを受けます)

従って、「・・・に借金などをするものではないよという」をドイツ語で表現する場合、jn davor warnen, Schulden zu machen が正しく、jn davor warnen, nicht Schulden zu machen と nicht を入れるのは誤りである旨の解説が辞書に掲載されています。ドイツ語から日本語に訳す場合は、「・・・しないように警告する」と訳せても、日本語で「・・・しないように警告する」という文がある場合、nicht を入れてしまうようなミスをする可能性がありますので、本当に要注意だと思います。これに加え、日本語では警告する相手は「誰々に対して」となり一見 3 格目的語が来るように見えますが、上記例文が示すとおり、ドイツ語の文では 4 格目的語を取ることに併せて注意すべきだと思います。一方でしかしながら、似た意味を持つ abraten (誰々に何々を思いとどまるよう忠告する) の場合は、Sie riet ihm davon ab, allein dorthin zu gehen. のように 3 格目的語が来ますので、少々ややこしいですが個々に習得していくほかないようです。

K. K.

2020年2月28日

2020年2月 Nr. 467

今回は、今や80歳を超える6人のドイツ人女性の長年に亘る友情が話題となっています。さて、女性取材記者エヴァ・ヴォルク (Eva Wolk) さんのレポートに登場する女友達の5人、エレン・イングリト・バナー (Ellen-Ingrid Banner) さん、ギーゼラ・ブロッホ (Gisela Bloch) さん、ローゼマリー・ハーマツハー (Rosemarie Hamacher) さん、ベアーテ・ヴィレムゼン (Beate Willemssen) さん、ウラ・ドーレ (Ulla Doré) さんは、ハイデルベルク大学の通訳養成機関で一緒に勉強した仲です。彼女たちは、第二次世界大戦が勃発する少し前に生まれました。つまり戦争終結時には6歳~7歳でしたが、今では80歳を超える年齢となっています。彼女たちは皆、決して同じ地域には住んだことはありませんでしたが、1年に一度会って、2,3日の間一緒に過ごしています。この集まりは、ハイデルベルク大学でのディプローム授与30年年記念式典での再会を機に、この5人の仲間と共同発起人である6番目の女性が発案して以来始まったものでした。

その女性のファーストネームはイルムガルト (Irmgard) さんですが、放送では姓名については言及されていません。イルムガルトさんは既に、数年前に亡くなっています。イルムガルトさんは、自分たちの会合の多くを企画・準備をしてきました。彼女はまた、ドーレさんがイギリスから夫と2人の娘たちと一緒にシュトゥットガルトに来られるように航空券を手配してあげてもいました。この会合にはいつも文化的催しもつきものです。イルムガルトさんはいつも、最も素晴らしいコンサートの切符を手配してくれていました。

彼女たちの会合では誰もが、一つ前の会合以降、どのように過ごしたか、どんないいことがあったか、どのような芳しくないことに遭遇したかを話します。彼女たちは皆、お互い近くに住んでおらず、年1回しか会えませんので、話す内容が自分たち以外に伝わることを心配することなく、互いに洗いざらい話すことができます。彼女たちが、悩み、心配事、喜びそれにさまざまな体験について他のメンバーに話す内容は、この仲間内に留まっています。彼女たちの間には信頼関係があります。そのようにして彼女たちは、ちょっと余り良いとはいえないことをしでかしてまったことについても話すことができます。

ブロッホさんが特にすばらしいと思うのは、自分たちの会合がどの回も前回の会合の続きのようになっていることです。1年後であっても、繋がりを再構築するためにまずは天候の話からするということをすることもなく、さっと彼女たちは本題の会話を引き続き行っています。そして彼女たちは互いに非常に親密なので、誰も他のメンバーに感銘を与えよ

うとした話をしようとはしません。何と立派な夫、何とすばらしい子や孫が自分にはいるということを他のメンバーの前で自慢するということは意味がないだろうといえます。ここではすべてありのままに率直に話すことができます。

彼女たちすべてにとっては、主要専攻科目はフランス語でした。バナーさんは他の 4 人をこの会合のためにケルンに招待し、ある宿屋に宿泊してもらいました。話すために彼女たちはバナーさんの居間に座りました。初日の夜、全くプライベートなことを多く互いに報告し合い、二日目の午前中は自分たちの友情の本質をなすものについて語り合いました。その場には女性取材記者ヴォルクさんはまだ居合わせませんでした。二日目の午後になってようやく、ヴォルクさんがこの放送の録音をするのたけに加わり、5 人すべてに対してまずはマイクに向かって自己紹介をしてくれるよう依頼しました。

ハーマッハーさんはケルンの生まれです。ハーマッハーさん一家には家政婦と子守の若い女性がそれぞれ 1 人いましたが、爆撃に遭い、繰り返し空襲で焼け出されました。ハーマッハーさんの父親はすでに早世していました。ハーマッハーさん一家は疎開させられ、ハーマッハーさんが 10 歳の時、一家はいつも木造バラックに住んでいました。しかしながら、徐々にではありますが、また一家の境遇が改善されていきました。ハーマッハーさんは、すでにアビトゥーア前に自らの大学での学業と自分の職業を上姉といっしょのスイス縦断の自転車旅行で決めていました。その旅行ではジュネーブにもやって来て、当時の国連ビルの中で数時間にわたり議場の傍聴席に半日も座っていました。そこでは 5 カ国語で通訳されていました。それがハーマッハーさんはとても興味深かったので、彼女にとって将来の職業を心に決めました。ハーマッハーさんは自分の職業を愛し、尊敬できる夫に巡り会いましたが、ハーマッハーさんがまだ 50 歳にならないうちに夫はもう他界してしまいました。それ以降、ハーマッハーさんは、すべてに対し自分自身で責任を負わなければなりません。

オルデンプルクはニーダーザクセン州の行政区域の一都市都市であり、またニーダーザクセン州の行政区域・県 (Provinz) でもあります。オルデンプルク市では Beiheft の 418 号及び 419 号で 2 枚の写真が撮影されました。もっとも、彼女たちがいくつかの村の教会を見学したその村々というのは、ハーマッハーさんがちょっとまた会合の担当をした時でしたが、オルデンプルク県にあります。

ヴィレムゼンさんにとって人生最悪の経験は 1945 年 2 月 13 日のドレスデン空襲でした。ヴィレムゼンさんたちが炎から逃れて安全な場所に避難しようとしたとき、家だけでなく、庭も燃えていましたので、まさに燃えている人々の上を乗り越えて行かなければなりません。それ以来ヴィレムゼンさんはひどく臆病になりました・・・。

さて、今回登場する 6 人の女性は、同じ大学を卒業後、ある時期に再会した際の提案により爾来、毎年会合を開くことになりました。彼女たちの来し方について、イベント、その発生西暦年及び年齢を時系列で振り返ってみたいと思い、以下の様に推測しました。会合は 50 歳台半ばにスタートし、放送の取材時点で 30 回近く行われていることが分ります。彼女たちの同窓会会合の切っ掛けは、ディプローム授与 30 年記念式典での再会でしたが、その意味でその式典は彼女たちにとって、単なる 1 回の記念式典以上の重みがあったに違いないと言えます。

生誕年 1938 年～1939 年

終戦 1945 年 (6, 7 歳)

大学卒業 1962 年～1963 年 (24 歳?)

ディプローム授与 30 年記念式典 1992 年頃 (54 歳?)

同窓会会合 1993 年～2019 年 (55 歳～81 歳?)

80 歳という年齢を考えますと、当時のドイツではまだ大学進学率がかなり低かった頃だと思われ、彼女たちはそれぞれその少数の高学歴者の 1 人だったのだらうと思います。毎年会合を開くことにより、翌年は前年の続きからの会合になるというのが何とも興味深い話です。また、肉親の自慢話ではなく、すべてありのままに率直に話すことができるというのも素晴らしいと感じました。また、放送で彼女たちの声を聞くと、放送の取材が入っていることを割り引いても、皆さん矍鑠としており、80 歳超という年齢を感じさせない声だと感じました。それどころか、特に AfD (「ドイツのための選択肢」) についての議論には熱がこもり、私には結構早口に思えましたし、語気に力を感じさせるほどでした。80 歳超という年齢を考えれば、5 人とも何かしらの病気を抱えているのだらうと想像しますが、放送およびテキストを参照する限りではこの点については言及がされていません。それぞれがドイツ各地に散らばって住んでいるにもかかわらず、高齢化が進むドイツとはいっても、80 歳超の同窓生 5 人が年に一度集まるというのも他に余り例がないのではと思います。今後とも彼女たちのこのいわば同窓会 (Klassentreffen) ができるだけ長く続いて欲しいと思いました。

また、今回強く私の印象に残ったのは 2 人の女性の体験でした。一つは、自転車旅行で立ち寄ったジュネーブの国連ビル議場で傍聴席に座り五カ国語の通訳を見学したことにより自らの職業を決めたというハーマッハーさんの将来への希望溢れる体験。それにドレスデン空襲時に炎の中を燃える人の上を越えて必死に逃げたというヴィレムゼンさんの恐怖の体験でした。特に涙ながらに自らの恐ろしい体験を語るヴィレムゼンさんの話しぶりには私には外国語であるドイツ語を通じて聞いたものとはいえ、胸に迫るものがありました。

K. K.